

## Johann Sebastian Bach (1685-1750)

バッハは中部ドイツの音楽家の家系の出身で、アイゼナッハの町楽師であった父やオルガニストであった叔父から音楽教育を受けた。1694年に母を、翌年には父を相次いで失ったため、オールドルフでオルガニストをしていた長兄のもとに身を寄せ、1700年からはリューネブルクの教会付属学校の給費生となって音楽の勉強を続けた。バッハの職業音楽家としての生涯は次の4期に区分される。

アルンシュタット / ミュールハウゼン時代 (1703~08年) : 教会オルガニスト

ヴァイマル時代 (1708~17年) : 宮廷オルガニスト、14年から楽師長

ケーテン時代 (1717~23年) : 宮廷楽長

ライプツィヒ時代 (1723~50年) : 聖トーマス教会カントール



バッハが最初に就職口を得たのはヴァイマルの宮廷で、1703年、18歳の4月にその宮廷楽団にヴァイオリニストとして採用された。8月には、アルンシュタットの新教会で新しいオルガンが完成し、バッハはその鑑定を兼ねて行われた採用試験で見事な腕前を發揮して高給で同教会のオルガニストに任命された。1705年には、当時最大の音楽家の一人だったブクステフーデのオルガン演奏を聴くために400kmほど離れたリューベックに赴き、彼の音楽に魅了される。有名な「トッカータとフーガ・ニ短調 BWV565」をはじめこの時期のオルガン曲にはブクステフーデの影響が強く認められる。

1707年の復活祭にミュールハウゼンの聖ブラージウス教会のオルガニストの後継者の試験に合格し、前任のアルンシュタット以上の好条件で採用される。そして、ミュールハウゼン着任後、マリア・バルバラと結婚する。22才の若さで一家をもち、やがて2人のあいだには7人の子供が生まれ、そのうちの2人は優れた音楽家に成長する。

1708年、ヴァイマル宮廷が新しいオルガニストを求めているのに応募して、宮廷オルガニスト兼楽師の地位に就く。ここではかなり自由な活動が許され、他の宮廷や他の町に出かけて行ってオルガンを演奏することも可能で、このため、オルガニストとしての名声はドイツ各地に広く広まった。ヴァイマル時代の最も重要な作品はオルガン曲で、多数の前奏曲とフーガ、トッカータ、コラール前奏曲などがこの時代に作られた。のちにケーテンやライプツィヒで完成された作品の中にも、このヴァイマル時代に着手したものが多く、楽師長に任命された1714年以降はカンタータの作曲と演奏に集中し、現存する約200曲の教会カンタータのうち30曲近くがこのヴァイマルで作られている。

1717年、バッハは新しい職場ケーテンに赴任した。ヴァイマルの宮廷で老齢の楽長が死亡したため、バッハはそのポストを望んだが果たせずに失望していたところへ、ヴァイマル宮廷と親戚関係にあったケーテン侯レオポルトから宮廷楽長に招聘されたからである。当時23才の若い領主レオポルトは音楽のよき理解者で、バッハの才能を尊敬し友人として扱った。当時のケーテンの宮廷楽団には17人の優れた器楽奏者がおり、バッハはこのメンバーを自由に使える立場に立った。この結果、数多くの器楽曲が生まれることになる。ケーテンの宮廷は、教会音楽を重んじないカルヴァン派(改革派)に属していたので、この時代のバッハの作品は器楽曲が大部分で教会音楽はほとんどない。

1720年7月に妻のマリア・バルバラを失うが、1721年12月に2度目の妻アンナ・マグダレーナを迎えることとなった。彼女は、その後29年間文字通りバッハのよき伴侶として、夫の仕事を助けつつ、ヨハン・クリスティアンのようなすぐれた音楽家を含む13人の子供を生んだ。

レオポルト侯の音楽熱が次第に薄れたことなどの理由から、バッハは1723年にライプツィヒの聖トーマス教会付属学校のカントールに就任した。カントールの仕事は、学校の教師と市の音楽監督の二つで非常に多忙な職務であった。教師としての職務は生徒たちの声楽と器楽の指導のほかには生活指導も含まれていた。一方、市の音楽監督としては、市内の主要教会の音楽を司るのが職務で、日曜・祝日の礼拝のために、聖トーマス教会のメンバーを指揮してカンタータを演奏するのが主要な任務であった。バッハは、就任後5年間はそのカンタータを毎週作曲したと言われている。さらにこの時期には「ヨハネ受難曲 BWV245」、「マタイ受難曲 BWV244」、「クリスマスオラトリオ BWV248」などの大規模な声楽曲も書かれている。

1720年代の終わり頃からは教会の監理者や市参事会とのいざこざが増え、教会音楽の数がめっきりと減り、器楽曲や世俗カンタータ等の作曲に活動が変化する。ライプツィヒの後半に作曲された曲には今日も有名なものが多く「口短調ミサ曲 BWV232」、「ゴルドベルグ変奏曲 BWV988」、「音楽の捧げもの BWV1079」、「フーガの技法 BWV1080」といった大作がある。

1749年5月におこった卒中の発作にともなってバッハの視力は急激に減退した。1750年2回にわたって手術を受けたが失敗に終わり、バッハの視力はすっかり奪われてしまった。そして7月28日、卒中の発作により静かに息をひきとった。

#### カンタータ第4番《キリストは死の縄目につながれたり、Christ lag in Todes Banden》BWV4

この曲は、コラール変奏曲という、バッハの他のカンタータには見られない形式をとっている。すなわち、宗教改革者マルティン・ルター作曲の讃美歌の歌詞をそのまま使用し、これを主題として声楽による変奏曲に仕上げている。バッハがミュールハウゼンにある聖ブラージウス教会のオルガニストに応募した際の試験作品であろうと言われている。

カンタータの前奏曲は14小節の弦楽合奏であるが、14という数字はBACHを表す。アルファベットを、Aは1、Bは2、Cは3と言う具合に数字に変換してBACHを合計すると14になる。バッハの音楽には、この種の数による隠された象徴が多く存在している。

#### カンタータ第106番《神の時こそいと良き時、Gottes Zeit ist die allerbeste Zeit》BWV106

この曲も、カンタータ第4番と同様バッハ初期のカンタータで、おそらくミュールハウゼン時代の1707年頃に作曲したと言われている。バッハの母方の伯父の葬儀のために書かれ、この伯父は、バッハにも少なからぬ遺産を残し、おかげでバッハはマリア・バルバラと無事に結婚できた。

#### カンタータ第147番《心と口と行いと生きざまは、Herz und Mund und Tat und Leben》BWV147

有名なコラール旋律「主よ、人の望みの喜びよ」を含むこのカンタータは、ライプツィヒに就任した年の夏に初演された大作である。原型はヴァイマルで作曲されていたが、ヴァイマルでは上演の機会を逃してしまい、しばらくそのままになっていたのを、手を加えて上演したのである。